

源信『往生要集』と法然浄土教

南 宏信

はじめに

恵心僧都源信（九四二—一〇一七）の影響は諸分野にわたるが、浄土教関連の著作『阿弥陀仏白毫観』『阿弥陀経略記』、特に『往生要集』が法然浄土教に与えた影響は大きい。平成二九年（二〇一七）に源信一千年遠忌の節目を迎えるにあたり、源信関連の企画展覧会や著作・論文雑誌が陸續と刊行されたことは記憶に新しい〔奈良博図録二〇一七〕〔梯二〇一七〕〔浄土宗教学院二〇一七〕〔福原二〇一八〕〔阿満二〇二二〕。展覧会の主題となるのは、浄土教関連の仏画、典籍、建築であったことから、我々が源信について関心を向け続けてきたのは、やはり浄土教思想が中心であったことが再確認できる。

本稿は令和六年（二〇二四）に宗祖法然上人（一一三三—一二二二、以下全ての尊称を略す）開宗八五〇年を迎えるにあたり、法然が浄土教に帰入する先達となった源信、特に『往生要集』に関連する話題を回顧し、今後の展望の

一端を示そうとするものである。

一、源信の伝記

源信の生涯を記した資料には、源信一人の伝記を単独で述べたもの、多人数の伝記を採録した叢伝に述べたもの、また説話・物語などが語ったものがあり、これらを全て合わせると相当数に上る。これまでに今津洪嶽氏〔今津一九一七、同一九四二〕、宮崎円遵氏〔宮崎一九五二〕、速水侑氏〔速水一九八七〕、福原隆善氏〔福原二〇一八〕などが整理している。これらの成果に若干の説明を補って示すと以下の通り。

①『首楞嚴院二十五三昧結縁過去帳』一卷（以下『過去帳』）

寛和二年（九八五）に比叡山横川の首楞嚴院で始修された念仏結社、二十五三昧会の会衆の過去帳である。諸本に「広本」「略本」「連名書」の三種がある。

「広本」は会衆五十一名が確認でき、そのうち源信を含む十七名の生涯が記されている。源信滅後（二〇一七年六月）から半年の間に記述されたことが推察される。宮内庁書陵部が昭和三十一年（一九五六）に購入したもので、『閑居友』の著者とされる慶政（二一八九―二二六八）が寛喜二年（二二三〇）に書写した奥書を有する。この書陵部本は昭和四五年（一九七〇）にコロタイプ印刷（『平安朝往生伝集』所収）で発表された。その後、平林盛得氏〔平林一九八五、同二〇〇二〕によって翻刻が紹介された。また昭和六三年（一九八八）には『続天台宗全書』『史伝2』でも翻刻されており〔天台宗一九八八〕、西村罔紹氏〔天台宗二〇〇〇〕が解題を付している。

「略本」は引接寺称名庵（三重県久居市）蔵本で、元禄六年（二六九二）写本、『恵心僧都全集』一に収録されている。「広本（書陵部本）」に掲載される十七人のうち源信・貞久・相助・花山法王・良範の五名を抜粋し順序を変えたものである。「広本」が報告されるまでは流布本として知られていた。

「連名書」は二十五三昧に結縁した二四名の名前を列挙したものである。「略本」同様『恵心僧都全集』一に収録されており、そこには「比叡山大林院今出川氏所蔵本」とある。奥書には延宝九年（二六八一）に飯室谷山本房恵照が所持していた古本を書写したとある。近年では高倉直人氏の研究がある「高倉二〇一五」。

② 『楞嚴院源信僧都伝』

鎮源（十一世紀頃）編『大日本法華験記』巻下に収録される。長久年間（一〇四〇—四四）の成立、源信滅後二十四年頃の記録。写本には高野山宝寿院（上巻、仁平三（一一五三）写一帖、重文、一九八三年に影印・翻刻が臨川書店から刊行されている）、彰考館文庫（徳川ミュージアム）、真福寺（室町時代写、一冊）があり、版本には享保二年版（二七二七）が諸機関に蔵される。活字版は『続群書類従』八輯上、『恵心僧都全集』五、井上光貞・大曾根章介校注『往生伝・法華験記』（一九七四年）がある。

③ 『延暦寺首楞嚴院源信僧都伝』 一卷 おおのすけくは 大江佐国

大江佐国（十一世紀中頃）編で、成立は一〇六一年が下限、滅後四十四年頃の記録である。大正六年（一九一七）に今津氏が報告（今津一九一七）し、後に源信誕生千年を記念して和装本で影印を掲載し（今津一九四二）、『恵心僧都全集』五巻において翻刻を掲載している。

本書は孤本であるが、④の『続本朝往生伝』（真福寺本）に「與別伝聊相違仍出之」「僧都別伝云々」「別伝云或人々」「事詳別伝」「別伝云長和二年々」「別伝云寛仁元年々」と抄出されている内容と一致することから、別伝

とはこの『延暦寺首楞嚴院源信僧都伝』であることが比定された。また玄智（一七三四—一七九四）『浄土真宗教典志』に指摘するように『法然上人行状絵図』四一に「法印明禅注進の恵心伝記の文云々」としてあげられる文もこの『延暦寺首楞嚴院源信僧都伝』である。鎌倉時代には本伝が一般的に流布していたようである。⑨と同一であると推察される。

④ 『權小僧都源信伝』 おののまゝ 大江匡房編

大江匡房（一〇四一—一一二二）編『続本朝往生伝』所収、源信滅後約九十年頃成立。現存諸本は真福寺蔵写本、宮内庁書陵部蔵写本が二種、大東急記念文庫蔵写本（完本で現存最古）、金沢文庫蔵写本、万治二年（一六五九）版本などがある。活字版には『群書類従』『日本往生全伝』『大日本仏教全書』『続浄土宗全書』『思想体系』がある。真福寺本については、近年影印・訓読・解題が刊行された（阿部・山崎二〇〇四）。本伝は他の伝記と対応しない部分が多いので、別系統の伝記である。また③で言及した通り、「別伝」として③の伝記を部分的に引用している。その他にも①や、出典不明の源信伝を一箇所ずつ抄出している。

⑤ 『別記』

現存せず。①の広本に長和二年正月までに積んできた「浄土業」を簡略化してあげており、それに続く以下の文によって「別記」の名が確認できるのみである。「其後所作亦有別記」此外又有「一卷十余紙書」。また③には「近會有天台碩徳授録僧都平生之書一卷」とあるのも同様の記録を指すと思われる。文脈からこれらは自己の作善を記録したものと推察され、源信の行業を知る上で貴重なものではあるが、伝記としての性格はなさそうである。

⑥ 『一卷十餘紙伝』

現存せず。⑤と同じ文脈で「此外又有二卷十餘紙書」とあり、⑤と同様伝記としての性格はなさそうである。

⑦ 『恵心行状』 一卷

現存せず。入宋僧成尋(二〇二—一〇八二)の『参天台五台山記』第四に「延久四年十月(宋神宗熙寧五年)成尋洛陽に入り、明教大師契崇に謁せんとするに、此の夏六月、既に遷化して在らず。即ち塔を礼し、伝法印住僧に恵心の往生要集三帖、及び源信僧都行状一卷等を示して、吾が国碩徳の述作あることを示すと見ゆる是なり」とある。延久四年(二〇七二)は源信滅後五十五年にあたるので、この時点で成立している伝記は①②③であるので、これらのいづれか、あるいはその系統のものが伝えられたと思われる。

⑧ 『日本諸儒参源信僧房作伝』 一卷

現存せず。同じく成尋『参天台五台山記』(延久四年十月二十五日条)に見え、成尋が伝法院住侶に示すものであるが、本文には「日本諸儒参源信僧房作詩」とあって「詩」であり、伝というほどのものでは無かったと考えられる。

⑨ 『恵心僧都伝』 一卷 大江佐国撰

名前のみ。長西の『浄土依憑経論章疎目錄』(長西録)に「恵心僧都伝 一卷 江佐国」、玄智『教典志』卷三・文雄の『蓮門経籍録』卷下等にも出る。今津氏によって③の著者が大江佐国と推定しているので、それと同様であると考えられる。

⑩ 『恵心僧都銘』 一卷 久気博士孝範撰

現存せず。『長西録』に「恵心僧都銘 一卷 孝範(久気博士)」とあり、『浄土真宗教典志』第三、『蓮門類聚経籍

録』巻下等にも載せるもの。書名より源信の讃銘のようなものを集めたであろうと考えられるので、伝記というほどのものではなさそうである。

⑪ 『恵心僧都之御物語双紙』 一巻

法隆寺蔵古写本。作者不明、室町時代の製作。表紙に「法隆寺真海」、奥付に「天正十一年壬寅（一五八三）九月十八日書写畢、真海法師」とある。昭和十年（一九三五）四月、正木直彦氏が法隆寺貫主佐伯定胤師の序を添え、跋を付して上梓。『元亨釈書』（一三三二年成立）や江戸時代の『本朝高僧伝』（二七〇二年成立）を除き、江戸時代に成立する『恵心院源信和尚行実』（⑭）や『恵心僧都絵詞伝』（⑯）等の伝記は、源信の出家と父母孝養に関する一切の記述を本伝から継承しているので、その内容の真偽はさておき諸伝の系譜をたどる上には重要な位置づけにある。

⑫ 『恵心僧都縁起』 三巻

存否不明。『浄土真宗教典志』第二に「恵心僧都縁起三巻、不置撰号、伝為宗徒作、草文、出像、寛文四年梓」とある。作者は不詳ながら、源信を七高祖の一人とする真宗の信徒による製作であることが分かる。

⑬ 『恵心僧都行状記』 一巻 西福寺慧空作

大谷大学蔵写本。『浄土真宗教典志』第二に「恵心僧都行状記一巻、元禄三年庚午九月、西本願寺慧空作、蓋恵心縁起略書耳」とある。

⑭ 『恵心院源信和尚行実』 一巻 白道恕哲撰

具名は『横川僧都源信和尚行実』ともいい、略して『恵心行実』などともいう。『浄土真宗教典志』第三に「恵心院源信僧都行実一巻、享保三年（一七二八）戊戌四月、和州当麻郷良福寺村阿日寺白道恕哲撰、蒐採諸伝」以

成三全伝、雖然、文辞繁冗、叙事失序、且就所拠諸旧記撿之、間有違錯云々とある。また玄智『源信僧都伝』(15)や同『浄土真宗七祖伝衍釋篇』にも本書について言及している。京都木屋町二條貝葉書院の蔵版。活字は『恵心僧都全集』に収録。なお本伝と同時期に作成された、源信の生涯を描いた絵伝である『恵心僧都絵伝』二幅が同じく阿日寺に蔵されている。

⑮ 『恵心僧都伝』 一卷 玄智景耀作

『横川僧都伝』ともいう。『浄土真宗七祖伝』三巻に収められる。同『浄土真宗教典志』第二、同第三、本書巻末に言及する。『七祖伝』は宝暦一三年(一七六三)に上中巻を刻し、明和元年(一七六四)に下巻を刻し、同二年(一七六五)に完成する。後の寛政元年(一七八九)にかなりの増減を加えて再刻している。また同『浄土真宗七祖伝衍釋篇』八巻(明和三年)なる注釈書があり、第六巻に源信が掲載される。

⑯ 『恵心僧都絵詞伝』三巻 引接寺法龍作

慶応二年(一八六六)春三月、源信滅後八五〇年を記念して上梓された。天台宗真盛派本山西教寺蔵版である。後に久下陸氏が復刻版を上梓している(久下一八九九)。活字は『恵心僧都全集』五に収録。なお平成二七年(二〇一五)には天台宗から源信一千年遠忌の記念事業の一つとして、当該伝記を底本とした『源信さん 浄土教の祖』(天台宗祖師先徳鑽仰大法会事務局)と題する絵本が発刊されている。

⑰ 『恵心僧都行状記』 一卷 願得寺実悟作

大谷大学蔵。実悟が永正十七年(一五二〇)に書いた『真宗聖教目録聞書』に「恵心僧都行状記一卷 形状ト云」とある。また慧空の『善龍寺聖教目録』にも「恵心形状記 一卷」をあげているが、選者を註していないので、⑬との区別は判然としない。今津氏の報告に対して宮崎氏が追加した一書となる。

他には⑮『私聚百因縁集』巻八「恵心事」、⑯『三國伝記』巻十二「恵心院源信僧都事」、⑳『今昔物語』第十二、㉑『元亨釈書』巻四、㉒『本朝高僧伝』巻十があげられる。また『発心集』『叡岳要記』『古事談』『宝物集』『仏祖統記』巻十二などにも散見される。

以上、源信の伝記類は多岐にわたるが、その生涯を語るにあたり最も依拠すべきものは①②③④である。⑤⑥⑦⑧⑩は現存せず、⑨は③と同本であると思われる。また源信伝が再び作成されるようになるのは室町期(⑩)からで、特に江戸時代以降に盛んとなっていく(⑫⑬⑭⑮⑯)。この流れについては、真盛(一四四三—一四九五)による天台真盛宗の興隆や浄土真宗が説く七高祖の一人としての源信への追慕があると思われる。

二、源信の生涯

佐藤哲英氏は叡山浄土教の流れを①初期伝承時代、②念仏興行時代、③新宗派生時代、④戒浄双修時代の四期に区別する。さらに②念仏興行時代を前期・中期・後期の三期に分け、中期に活躍した僧として源信を位置付けている(佐藤一九八九)。相当数の伝記があることは既に述べたが、速水氏(速水一九八八)や小原仁氏(小原二〇〇六)などが信頼のおける諸伝記から世寿七六歳の相を描いており、年譜も都度作成されている。紙幅の都合上、生涯全体については速水氏、小原氏の論考に譲り、今は『往生要集』と二十五三昧会に関連する事項のみを紹介する。

『往生要集』の執筆は永観二年(九八四、四三歳)十一月に開始する。そして僅か半年後の永観三年四月八日(九八五、四四歳)に『往生要集』は完成するが、ちょうどその執筆期間中の正月三日に師良源(九二—一九八五)が七

四歳で没している。

また『往生要集』執筆期間とほぼ同時期に源為憲（一一〇一一）が『三宝絵』を、また慶滋保胤（九三三一一〇〇二）が『日本往生極楽記』の初稿を作っている。この二人は康保元年（九六四、源信二十三歳）から始まる勧学会の結果であることは興味深い。

勧学会は康保元年（九六四、源信二十三歳）三月から保胤をリーダーとして活動を開始する。詳細は本書和田論稿を参照願いたいだが、その活動は二十年後の源為憲編『三宝絵』三卷（永観二年（九八四）成立）に紹介されており、年中行事として定着していたことが窺える。さらに勧学会創始の頃の参加者や詩などを記録した「勧学会記」と命名された文献が昭和五八年（一九八三）に西新井大師総持寺から発見され国の重要文化財に指定されている。これらによると三月と九月の一四日の夕方に延暦寺の青年僧と大学寮の学生ら各二十人が比叡坂本に集い、詩一句を誦すごとに酒三盃を傾けたという。文人たちにとって詩と酒は不可欠であったことが窺える。法会初日の翌一五日期には『法華経』の句偈を講じ、夕方には阿弥陀仏の名号を称える。その後は夜明けまで『法華経』の一句を題として詩を作り、仏・法を讃歎した（小原二〇一六）。約二十年続いた勧学会だが、保胤が四四歳の時、寛和二年（九八六、源信四五歳）に出家したこと（寂心）で解散もしくは消滅している。その後の五月二三日、横川において勧学会と入れ替わるように発足するのが、二十五三昧会である。

二十五三昧会とは同九月十五日には寂心（保胤）が念仏往生の規約をまとめた草案『横川首楞嚴院二十五三昧起請』（『起請八箇条』）を作成したと言われている。この時点で源信はまだ二十五三昧会には加入していないが、二年後の永延二年（九八八）六月十五日に、十二箇条（『起請十二箇条』）からなる規則を源信が完成させており、この時までに加入していたようである。平素、結果は阿弥陀仏の縁日である毎月十五日の夕に集まって、阿弥陀仏を供

養生ながら不断念仏を修するように定めている。結衆同士は家族と同様の想いで接し、自身は戒律護持の生活に努める。また結衆の中から病人が出た時には往生院に移して看病し、臨終の際には加持した土砂を骸にかけて葬送する。その往生の記録は『過去帳』として伝存しており、源信最古の伝記であることはすでに説明した通りである。これらの規則は『往生要集』大文第六別時念仏に説く臨終行儀の説示を基本にして作成されている。なお二十五三昧会が発足した当時の状況については勝田至氏に詳しい〔勝田二〇〇三〕。

やがて源信自身にも臨終が近づいてくる。『過去帳』（広本）にその様子が記されている。さまざまな学問を修めてきた源信であったが、何を以てその第一の「宗」とするのかという問いに対して「念仏を宗とする」といい、「往生の業には称名念仏で十分である」と答えていることは善導の本願念仏を念頭にしていなはいえ、法然に先行する称名念仏への傾倒のエピソードとして注目に値する。

源信の時代、臨終時に来迎を期待するには、いかに正念を保つことができるかが最大の関心事であった。臨終の数日前には、源信に正念させるためにある僧が出現するという霊夢を見ている。この時代は自らが正念を保つことで臨終時に阿弥陀仏の来迎があると解していた。ところがこの霊夢ではそうではなく僧が正念をさせるために源信の前に現れている。この僧が何者を表現しているのかは不明ながらこのエピソードを祖型とするような興味深い説示が法然にもある。『逆修説法』一七日に「臨終正念なるが故に来迎したまうにはあらず、来迎したまうが故に臨終正念なりという義明あきらかなり」（昭法全三三四）というものである。正念であるかどうかは、臨終する者の側ではなく阿弥陀仏側のはたらきかけにあると捉えていることが重要である。

三、『往生要集』について

著作については『恵心僧都全集』（全五巻）で網羅することができ、解題も作成されている（龍谷学会一九三六）。これまでの源信関連の研究蓄積は多岐に渡って膨大であり、その都度整理され、また現在も研究が進められている（福原一九八五）〔往生要集研究会一九八七〕〔速水一九八八〕〔章・石田一九九二〕〔大隈・速水一九九二〕〔小原二〇〇六〕〔村上・吉田二〇二〇〕。本稿では源信の研究成果を逐一網羅するには紙幅も筆者の能力にも限界があるので、今は『往生要集』と法然浄土教との関連に絞って論じていきたい。

まず『往生要集』の諸本については、『仏書解説大辞典』や『国書総目録』などで確認できるが、新たに写本・版本が発見される度に、研究や影印・翻刻の公開がなされてきた。古くは花山信勝氏の研究があり、元禄十年（一六九七）版を底本とし、諸写刊本十五本でもって校訂をしている〔花山一九三七〕。その後は著作が発表される度に整理されてきた〔石田一九七〇〕〔藤井一九七八〕〔福原一九八五〕〔西村一九八七〕〔北畠一九九二〕。『往生要集』はいわゆる遣宋本・留和本の二系統に分類されるが相馬一意氏は花山氏の成果を再検討して修正を加えている〔相馬一九九二〕。それら諸本整理の集大成に佛教大学総合研究所編『浄土宗典籍目録』『往生要集』の項目（執筆担当は上杉智英氏）がある〔佛教大学二〇一一〕。写本一三種、刊本六種をあげ、それぞれの書写奥書、刊本の奥書刊記や跋文を採録している。以降もしばしば写本が確認されており、近年では長徳二年（九九六）の書写奥書をもつ石川県聖徳寺（大谷派）蔵写本（中巻のみ）、建仁二年（一二〇二）の書写奥書を持つ愛知県西方寺（高田派）蔵写本（上巻のみ）が紹介されている〔京博図録二〇二三〕。また『浄土宗典籍目録』が省略している江戸期版本を国文学研究資

料館「国書データベース」などで補い合わせるとゆうに四〇種を越える。今後これらの情報を活用してさらなる諸本の整理が進められるであろう。

『往生要集』の成立状況については、跋文を取り上げた研究が新たな知見を提示している。善裕昭氏はこれまで欠本で逸文のみでしか知ることができなかった天台僧真源（二〇六四―一三三六）の『往生要集依憑記』三卷（以下『依憑記』）のうち、東寺観智院金剛藏から発見された上中二巻を考察した。その結果、これまで源信が永観二年（九八四）十一月から起筆し翌三年四月に終了したことが知られていたが、『依憑記』を検討することで終了月日が四月八日であったことや、執筆にあたり協力者が何人かいたことが指摘されている。またこれは仁安二年（一一六七）書写の興福寺本『往生要集』（仮名書き）とのみ同内容であることが指摘された〔善二〇〇五〕。それを受けて上杉智英氏はそれらを比較し、『依憑記』↓興福寺本↓流布本という流れで跋文が成立したことを明らかにした〔上杉二〇一〇〕。

また『往生要集』の成立に関しては武覚超氏の研究も注目される。従来石田瑞磨・平林盛得両氏が『往生要集』に師良源『極楽九品往生義』の引用がないことから、源信の浄土教は良源の影響下にはなかったとする指摘があった。しかし引用経論を検討すると、確かに『極楽九品往生義』の書名を出して引用することはないが、同じ経論を同じ文脈で『往生要集』が引用していることが判明した。『極楽九品往生義』には良源仮託説まで出ていた中で、良源と源信との連続性を示す研究であるといえる〔武二〇一九〕。

四、法然と『往生要集』の関係

①『往生要集』への帰入

『往生要集』と法然の関係については石井教道氏による法然遺文の整理がある〔石井一九五五、同一九五七〕。石井氏は法然の念仏思想を①万行随一念仏期（恵心時代、久安三年より承安五年に至る）、②本願念仏期（善導時代、承安五年より文治六年に至る）、③選択念仏期（元祖独創時代、文治六年以後）の三段階に分ける。そして法然遺文のそれぞれをいづれかの時期に配することで、法然の思想変遷を時系列で追えるように整理した。この分類は様々な表現が出てくる法然の念仏思想を理解する上で現在においても基準の一つとなっている。そして道光（二二四三―一三三〇）編『黒谷上人語灯録（漢語）』（以下『古本漢語灯録』）に収録する『往生要集積』『往生要集料簡』『往生要集略料簡』『往生要集詮要』の四種（以下『積』『料簡』『略料簡』『詮要』、総称する場合は『要集』四積書）を①に配する。『法然上人伝記』（以下『醍醐本』）にも「往生要集を先達として浄土門に入るなり。この宗の奥旨をうかがうに、善導を二へん、これをみるに往生難しと思えり。第三べんのころ、乱想の凡夫、称名の行によって往生すべきの道理を得」（原漢文）とあることや、黒谷に隱遁した法然の師叡空が円頓戒相承の正統であり、かつ『往生要集』の講説に長けていたことを勘案するに、石井氏が『要集』四積書を①に配したことは自然な判断であろう。（その後『要集』四積書の成立をめぐる議論は後述する。）

②立教開宗と『往生要集』

法然の立教開宗の課題について藤堂恭俊氏は、主に「醍醐本」と『要集』四積書に依りながら論じている〔藤堂

一九七〇、一九七一」。それによると法然は『往生要集』序文から易行としての念仏一行を選び取るべきことを見出し、また大文第四正修念仏門に説く観念と称念のうち称念を選び取って「但念仏」とした。また大文第八念仏証拠文に説かれる「六義」から直弁、自説、摂取の三義を特に阿弥陀仏の衆生救済の意志の表れとして捉えた。阿弥陀仏の本願にこそ言及しないが、仏の救済の意志に関心をよせ、それに留意していた。

一方で「但念仏」に対して大文第五助念方法門に説く「七法」の念仏を「助念仏」と位置付ける。源信は助念方法門の結びで「いづれの業をか往生の要とするや」という自問に「助念仏」こそが往生の要であるという。この「但念仏」と「助念仏」に対して法然は大文第十問答料簡門に引く善導『往生礼讃』に基づき、「専」をもって「但念仏」、「雑」をもって「助念仏」とし、「百即百生」を「但念仏」に期待したとする。善導の念仏を「称念」、源信の念仏を「助念」として両者の念仏を分別していく。

藤堂氏はここに法然が源信から善導へと移行していく分岐点があると捉える。法然はなぜ「助念仏」と決別し、易行である（まだ本願には言及しない）「但念仏」の方に注目したのか。「助念仏」の「七法」とは①大菩提心、②護三業（十重禁戒）、③深信（深心）、④至誠（至誠心）、⑤常（無間修）、⑥念仏、⑦随願（回向発願心）のことであり、特に源信は持戒を強調する。その理由は、まさに念仏を修することができれば本来持戒も不要だが、実情は心が澄みきった状態が現れるのは稀だからである。源信は持戒と念仏の併修を説いているが、法然は乱想・妄心を未然に防ぐ戒をたもつことをとりあげられなかった。三学非器の自覚により、易行（称念、弥陀のはたらき）に懸けたのである。『往生要集』を通して善導に直参すべきことに気づいた法然は、ついに『観経疏』散善義の「一心専念の文」に邂逅することによって浄土宗を開くこととなった。

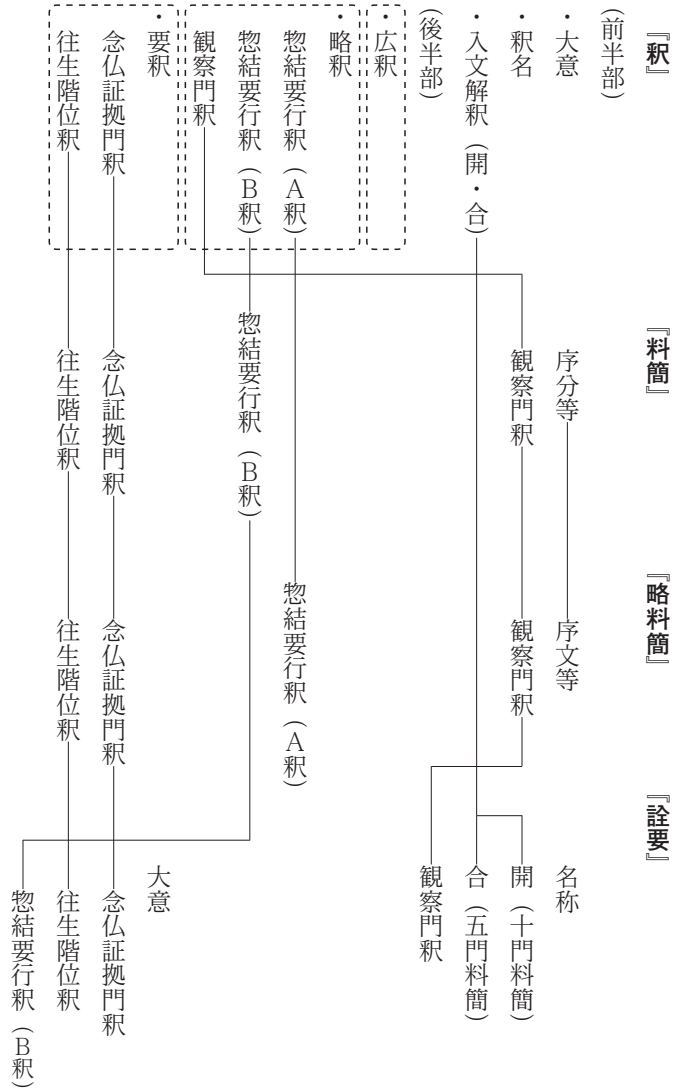
③法然遺文における『往生要集』の特徴

それでは善導の本願念仏に至った法然は、『往生要集』をどのように位置づけていたのであろうか。福原氏は『往生要集』と『逆修説法』の関係について、『逆修説法』は阿弥陀仏の功德を説く際に『往生要集』を中心とする源信の著作が、重要な役割を果たしたという〔福原一九八八〕。他の法然遺文にはない特徴である。後に福原氏は法然の法語から源信並びに著作の引用を検討することで、十六項の特徴を論じている〔福原二〇〇二〕。

さらに『逆修説法』と『選択集』の関係について高橋弘次氏は阿弥陀仏とその浄土（正報・依報）の功德を説き示すのは、『選択集』に説き示すことの少ない『逆修説法』の独壇場といってよいという〔高橋一九八八〕。福原氏の指摘と合わせると、阿弥陀仏の功德を前面に出すのか（『逆修説法』）、行者の念仏実践を前面に出すのか（『選択集』）、この差が『往生要集』を引用するのかがどうかに表れるのである。その後安孫子稔章氏は『逆修説法』における源信の影響について考察をさらに深め〔我孫子二〇一六〕、齋藤蒙光氏は『逆修説法』における『阿弥陀経略記』における白毫功德の引用に絞って考察をしている〔齋藤二〇一九〕。藤堂俊英氏は、浄土宗の信仰や教行における三要素である所求（往生浄土・所帰（阿弥陀仏）・去行（本願念仏））の概念は、法然が直接使用するものではないが、宗学的観点から『逆修説法』所説の阿弥陀仏における功德が所帰に繋がるという〔藤堂二〇一九〕。

④法然『往生要集』四積書

さて『要集』四積書とは既出の『釈』『料簡』『略料簡』『証要』のことを指す。『要集』四積書の内容、構成は似通っており、以下の通りである。



『要集』四釈書の成立については服部正穂氏がそれまでの説を整理している〔南二〇一〇〕。前期説は暗黙の了解で思想的に見て前期に該当させているものや、『選択集』の選択本念仏思想と比較して、『要集』四釈書がその段階

まで熟していないことを根拠とする。後期説の根拠では諸伝記の記事に信頼を置くことで整合性を図るものや、伝記の記述を根拠とする前期説ではありあえないという。他にも本願への注目や他宗に対する弁明書であるなど様々な根拠があげられる。

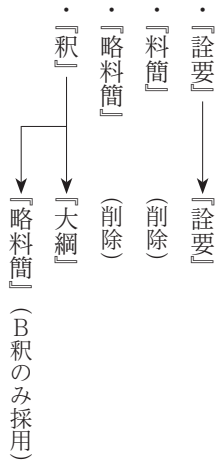
前期説・後期説の議論から次第に議論は複雑化し、順次成立説が主張される。服部氏、末木文美士氏は『詮要』↓『料簡』↓『略料簡』↓『釈』という順に成立したと主張する。これに対し林田康順氏は『料簡』↓『略料簡』↓『釈』↓『詮要』であるという。嶋田法宣氏は『詮要』↓『大綱』(『釈』の前半部)↓『料簡』↓『略料簡』を主張し、それぞれを黒谷在居中、建久二年、建長八年、元久二年に配する。嶋田氏の主張を突き詰めていくと、法然はなぜ、ほぼ同内容の『要集』四釈書を、バリエーションを変えてその都度著す必要があったのかという問題が立ちただかる。その後いくつかの研究も出ているが、状況は大きく変わっていないように思われる。

『要集』四釈書の解決しがたい問題の一つは、大文第五助念方法門の惣結要行の解釈である。『釈』の「略釈」で大文第五助念方法門を注釈するのであるが、「七法」に説く念仏(称念ではあるが助けがある)は『往生要集』全体の正意ではなく、助念方法門のみに限った結論であり、『往生要集』全体の正意ではないとする。『往生要集』の正意とは、まさに念仏を修することができれば、必ずしも持戒しなくても良いものである(A釈)。

ところが、この直後にまたA釈と同様の説明が繰り返されるのであるが、それだけではなく結論箇所「七法」に説く「助念仏」が『往生要集』全体の正意・肝心であるという。また『往生要集』の念仏と善導の念仏とを区別する(B釈)。

一書の中に同内容の文章を繰り返し返し、矛盾する結論をそれぞれ述べるA釈とB釈とが併存するという事態は、通常我々が想定している書物とは趣を異にする。だからこそこの矛盾については古来先達も苦慮してきた。良忠(一

一九九—二二八七)『往生要集義記』の前身である『往生要集鈔』ではA積のみを引用し「此の段の料簡、上人の積在り」といいながらも、「故に之を略すといえども諍論のことあり」という。惣結要行の解釈をめぐって論争があったことを示唆している。また江戸時代の義山(一六四八—一七一七)は新本『黒谷上人語灯録(漢語)』において、『要集』四積書を次のように編集する。



確かにこのような作業をすれば、矛盾なく読むことが可能となる。法然の『要集』四積書は道光編『古本漢語灯録』で初めて揃う文献である。『選択集』『逆修説法』『東大寺講説』のようにその因縁譚も伝えられていない。平雅行氏はB積が後世の加筆増補部分であるといい「平一九九二」、それ以降の研究者は平氏の指摘を踏襲しながら進めていくことになる。だが平氏という「後世の加筆増補」とは一体何を意味するのであろうか。

『古本漢語灯録』内に揃う『要集』四積書を比較しても、それが精緻になればなるほど越えがたい壁が立ちはだかる。この状況を抜け出すためにはアプローチを変える必要がある。そこで俎上に上がるのが『釈』である。『釈』は金沢文庫に二種の古写本が単独で存在する。一つは良忠の弟子良聖(二三三—)の手沢本、もう一つは越後で書写された以下の奥書を持つものである。「承久二年六月十二日於越後国府為往生極楽拭汗書了」とあり、承久二年(一二二〇)は法然滅後八年にあたり、『釈』諸本の中で最古にあたる。

この『釈』を前半部「大意」「釈名」「入門解釈」と後半部「広釈」「略釈」「要釈」がいう「念仏」にはそれぞれに振れ幅が認められ、おおらかな括りで念仏を説いている。特に前述の「略釈」の問題を勘案するにそもそも一つの書物としての要件を満たしているとは思われない。平氏がいう後人が現在の『釈』の形に加筆したという主張に従った場合でも、法然滅後八年という相当早い段階で法然遺文の一部を入手できるにも関わらず、不自然としか言いがたい加筆をして一つの書物として編集する法然門下はどのような人物なのであろうか想定しがたい。このような状況から『釈』は元来複数の断片（A釈とB釈も含む）があり、それがいつしか現在の形にまとめられたのではないかと推察する。想像を逞しくすることについて寛恕を乞えば、A釈もB釈も法然の思想変遷の過程における揺れであつて、それが手控えとしてタイムカプセルのように保存されたのではないだろうか。道光や義山のように法然から時代が離れているのであれば、その関心は良きテキストを求める方向に動くのであろうが、法然滅後八年の段階では、その断片類を所持していること自体が法然門下である証にもなりえよう。文献内に多少の矛盾があろうとも、宗祖の記述に改編を加えようとはせず、そのまま護持するのではなからうか。いずれにせよ『要集』四釈書内の議論はやがて本願念仏による「偏依善導一師」に傾いていくことになる。

これに対して下端啓介氏は『釈』の前半部の「入文解釈」の「合」と後半部の「広釈」「略釈（A釈B釈を含む）」「要釈」が密接な関連性があるとし、一つの書物として一貫して読むことができる」と論じた（下端二〇二〇）。A釈B釈を含む『釈』が一貫して読むことが可能であるという主張は、良忠・義山から近年の研究者に至るまで苦慮してきた問題に対して一線を画すものである。これはまたA釈のみを載せる『略料簡』、B釈のみを載せる『料簡』『詮要』は『釈』とどのような関係になるのであろうかという順次成立説の問題に答えなければならなくなる。いずれにせよ『要集』四釈書の問題はいまだ未解明な問題が残されている。

⑤ 八種選択義の淵源としての『往生要集』

『逆修説法』『選択集』といった法然遺文における『往生要集』の引用に関する特徴はすでに触れたが、それでは『要集』四積書と他の法然遺文との関連性は論じられないのであろうか。やはり法然は『要集』四積書での議論を完全に放棄して「偏依善導一師」に向かつていったのであろうか。そうではない。『要集』四積書はその形を変えながら「偏依善導一師」のフィルターを通過することで、法然の思想を深めていく糧となっていく。

その一つに「八種選択義」があげられる。「八種選択義」とは、称名念仏が弥陀・釈迦・諸仏同心の「選択」であることを称揚するために『選択集』で「浄土三部経」を根拠として導出する概念であり、①「選択本願」②「選択讚歎」③「選択留教」④「選択摂取」⑤「選択化讚」⑥「選択付属」⑦「選択証誠」⑧「選択我名」をいう。考察の結果、八種中六種（①②④⑤⑦⑧）までが『往生要集』大文第八念仏証拠門を「南二〇一五」、③は『往生要集』大文第三極楽証拠門をそれぞれ淵源として成立していることが明らかとなった「南二〇一九」。

『詮要』については「醍醐本」に述べる『往生要集』の記述と近似することは注目される。齋藤蒙光氏は『詮要』を中心に法然遺文との関連性について考察し「法然には、『要集』をはじめとする源信の著作を文面どおりに受け止める態度のみならず、その真意が善導や自身の念仏思想と合致するようにと積極的に会通していく態度も見られる」とし、『要集』四積書↓三部経講説↓『逆修説法』↓『選択集』という順に考察して法然は『要集』四積書の課題を順に克服していったという「齋藤二〇一四」。

おわりに——課題と展望——

以上、源信と法然浄土教との関係に絞って一応の研究史を概観してきた。本稿では言及できなかった論考も多々あるが、特に親鸞と『往生要集』の関係や良忠『往生要集義記』の解明、室町時代に興起する天台真盛宗における浄土教の研究も課題であらう。

一方で源信の浄土教関係以外の著作の解明が盛んになっている。これまでには上杉智英氏による『要法文』の研究〔上杉二〇一一〕や、藤村潔氏による『二乗要決』についての一連の研究〔藤村二〇二二〕がある。近年では柳澤正志氏は天台の碩学として学問の先頭に立つ源信を前景化してアプローチしている〔柳澤二〇一八〕。柳澤氏は日本天台において伝統的に問題とされたと思われる問題や、源信の志向が顕著に表れると思われる事理不二の問題について取り扱っている〔柳澤二〇二〇〕。また村上明也氏における唐決の研究も注目される〔村上二〇二三〕。今後、これらの研究が進展して一つ一つのピースが埋まっていくことで、源信の実像が浮かび上がってくるであらう。

〈参考文献〉(五十音順)

- 我孫子稔章『「逆修説法」における源信の影響について』(『仏教文化学会紀要』二五、二〇一六年)
 阿部泰郎・山崎誠編『真福寺善本叢刊』第七卷【影印篇】【訓読・解題・索引篇】(臨川書店、二〇〇四年)
 阿満利磨『往生要集』入門(筑摩書房、二〇二一年)
 石井教道『昭和新修法然上人全集』「序文」(平楽寺書店、一九五五年)
 石井教道『元祖教学の思想史的研究―特に念仏思想と門下の動向について―』(『浄土学』二五、一九五七年)

- 石田瑞磨校注『日本思想体系6 源信』（岩波書店、一九七〇年）
- 今津洪嶽「正元古写源信僧都伝証註」（『山家学報』二、一九二七年）、後に恵心僧都降誕一千年奉賛会『源信伝』（一九四一年）に再掲。和装本のみ影印を掲載）
- 上杉智英「『往生要集』跋文の変遷」（『印度学仏教学研究』五八一―二、二〇一〇年）
- 上杉智英「『要法文』撰述年次の再考」（浅井成海編『日本浄土教の諸問題』永田文昌堂、二〇一一年）
- 往生要集研究会「往生要集研究」（永田文昌堂、一九八七）
- 大隈和雄・速水侑編『日本名僧論集四 源信』（吉川弘文館、一九九二年）
- 小原仁「源信」（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）
- 小原仁「慶滋保胤」（吉川弘文館、二〇一六年）
- 梯信暁訳註「新訳往生要集」上下（法藏館、二〇一七年）
- 勝田至「死者たちの中世」（吉川弘文館、二〇〇三年）
- 北畠典生「往生要集綱要」（永田文昌堂、一九九二年）
- 京都国立博物館「親鸞聖人誕生八五〇年特別展 親鸞——生涯と名宝」（二〇二三年）
- 久下陞編「恵心僧都絵詞伝」上中下（隆文館、一九八九年）
- 齋藤蒙光「法然上人の『往生要集』観——『選択集』第三・四章を中心に——」（『法然仏教の諸相』法藏館、二〇一四年）
- 齋藤蒙光「法然上人の『往生要集』観について——『往生要集詮要』を中心に——」（『仏教論叢』五八、二〇一四年）
- 齋藤蒙光「法然の阿弥陀仏解釈——『逆修説法』と『阿弥陀経略記』との関連性——」（『印度学仏教学研究』六七―一、二〇一八年）
- 齋藤蒙光「法然の阿弥陀仏解釈——『逆修説法』と『阿弥陀経略記』との関連性——」（『共生文化研究』四、二〇一九年）
- 佐藤哲英「叡山浄土教の研究」（百華苑、一九八九年）
- 下端啓介「法然『往生要集釈』における合・広・略・要の関連性」（『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』四八、二〇

二〇〇年)

章輝玉・石田瑞磨『浄土仏教の思想六 新羅の浄土教 空也 良源 源信 良忍』(講談社、一九九二年)

浄土宗教学院『佛教文化研究 一千年御遠忌記念惠心僧都源信特集』六〇(二〇一七年)

善裕昭「真源『往生要集依憑記』について」(『浄土宗学研』三三、二〇〇五年)

相馬一意「『往生要集』 遺宋本・留和本の再検討」(『印度学仏教学研究』四一一、一九九二年)

平雅行『日本中世の社会と仏教』(塙書房、一九九二年)二〇八頁

高倉直人「二五三昧会の研究―『楞嚴院二五三昧過去帳』の記述を中心に―」(『浄土学』五二、二〇一五年)

高橋弘次「『逆修説法』と『選択集』」(『藤堂恭俊博士古稀記念浄土宗典籍研究』同朋舎、一九八八年)

武覚超「『往生要集』の成立に関する考察―特に『九品往生義』との関連を中心に―」(『坂本廣博博士喜寿記念論文集』、

二〇一九年)

天台宗典編纂所『続天台宗全書 史伝2』(春秋社、一九八八年)

天台宗典編纂所『正統天台宗全書目錄解題』(春秋社、二〇〇〇年)

藤堂恭俊「浄土開宗への一歷程―源信より善導へ―」(香月乗光編『浄土宗開創期の研究』平楽寺書店、一九七〇年)

藤堂恭俊「浄土宗開創前後における法然の課題をめぐって」(『仏教文化研究』一七、一九七二年)

藤堂俊英「『逆修説法』講説」(『浄土宗学研究』四六、二〇一九年)

奈良国立博物館「二〇〇〇年忌特別展 源信 地獄極楽への扉」(二〇一七年)

西村岡紹「『往生要集』 諸写刊本の研究」(往生要集研究会『往生要集研究』永田文昌堂、一九八七年)

花山信勝「原本校注・漢和対照 往生要集」(山喜房仏書林、一九三七年)

速水侑「源信伝の諸問題」(田村圓澄先生古稀記念会編『東アジアと日本』宗教・文学編、吉川弘文館、一九八七年)、

後に速水侑『平安仏教と末法思想』(吉川弘文館、二〇〇六年)に収録。

速水侑『源信』(吉川弘文館、一九八八年)

- 平林盛得「楞嚴院廿五三昧結衆過去帳(資料)」(『書陵部紀要』三七、一九八五年)
- 平林盛得「慶滋保胤と浄土思想」(吉川弘文館、二〇〇一年)
- 福原蓮月「往生要集の研究」(永田文昌堂、一九八五年)
- 福原隆善「『逆修說法』と『往生要集』」(『藤堂恭俊博士古稀記念浄土宗典籍研究』同朋舎、一九八八年)
- 福原隆善「法然における源信教学の受容と展開」(『佛教大学総合研究所紀要別冊『法然浄土教の総合的研究』、二〇〇二年)
- 福原隆善「源信和尚千年」(山喜房佛書林、二〇一八年、昭和五十三年から平成二十九年にかけて執筆した源信に関する論考をまとめたもの)
- 藤村潔「源信『一乗要決』における悉有仏性説」(『日本仏教学会年報』八七、二〇二二年) など
- 藤井智海「往生要集の文化史的研究」(平楽寺書店、一九七八年)
- 『佛教大学総合研究所編『浄土宗典籍目録』(二〇一一年)
- 宮崎円遵「源信和尚の別伝について」(『中世仏教と庶民生活』、平楽寺書店、一九五二年)
- 南宏信「法然浄土教における『往生要集』理解の展開―法然・弁長・良忠の相承において―」(学位請求論文(課程博士)、二〇一〇年)
- 南宏信「法然「八種選択義」の淵源―『往生要集』から『選択集』へ―」(『浄土宗学研究』四一、二〇一五年)
- 南宏信「法然『選択留教』に見る『往生要集』の影響」(『浄土宗学研究』四四、二〇一九年)
- 村上明也・吉田慈順(編)『源信撰『阿弥陀経略記』の訳注研究』(法藏館、二〇二〇年)
- 村上明也「継承される「唐決」―恵心僧都源信を中心として―」(『印度学仏教学研究』七二―一、二〇二三年)
- 柳澤正志「日本天台浄土教思想の研究」(法藏館、二〇一八年)
- 柳澤正志「源信の天台教学研究」(『日本仏教総合研究』一八、二〇二〇年)
- 龍谷学会編輯「源信和尚撰述著作解題」(『龍谷学報(源信和尚研究号)』三一七、一九三六年)、天台関係を佐藤哲英氏、

浄土教関係並びに講式類などは八木昊恵氏、俱舎因明に関するものは合阪逸郎氏が担当している。

キーワード 源信、『往生要集』、法然、八種選択